



民家分書記

三

再板



百姓分量記第三

野州後學常盤貞尚演

婦と醫擇並去不去此辨

婦と醫る法第一を足母魚人をくある由

疾に月乃るにをいふまはを魚と志うと

初素速おし進い子孫一殊と海と族女一魚

痛此致ハ穿鑿して厭い一又先程一刑付

女らり一歌るを母淫乱此少一何々の業修

生育しるるの先ホハ全く厭い一又胎甲嬰

こにを接く一何の眼赤赤色一何の體代おせハ面月

かろくへ始末の事一から見たる人の腹を
志すはまゝのへ厭へるごと聖妻はあつひを
てまゝに離れりる程程と愈々再寫の合紙
ふんふん又筆を威嚇する驕るまゝ取仕一
ふもまたを臨むにわづらひと流しとる物
づ又ふり溜るは堪へずあつひは兼て世を
神よ及びいふ人の謀るは事の場ハゆゞ
内甲とて是をさすもいふは僕等といつ
ぬか子のたふす物あつひは不幸の事とて
あつひは

ハとてわづらひの事父母たり流しとる物
あつひは志くハかゝ我らに實をさるゝ事
妻の食味り用ゐる程に別るゆへはあつひ
了合はるゝ事あつひはすまゝに教ふは内
あつひは入付にあり内務をたらしめは持
月をさすもいふはかゝるゝ則ち不縁と
あつひは合に田物賣拂ひとるあつひは
あつひは茶物を我より煙をさすもいふ
あつひは物あつひは思ふと人の機成取
あつひは

警昌とてつれを被抄糸並世も多た事解く
ゆつとハ渡りたつハ女一人一生の貧福を
極つとありおて多んと難者も秋もりありと
疎くわい物せと思ひゆる末に秋物もつる事
とちくと考へ給へ

妻は去りあり不妻理あり弟も有ありハ
幸ふと去へし福礼あり去へし悪病あり
ハ去へし女もあり去へし傍折あり去へし
嫉妬除くやしむたつハ去へし又ふかき去

法寺も去つて下ハ神あり先者の御ハ去
まじとて神ハ子種もかたにたふやと志きさる
親の業も入付の道もあつて去ハ不にあり
世間の世ハ有者も去ハ書はを納めさせと妻
にとも登べしと志きさるふかきハ去るは親
此の中にも娘もいあり
母と志きさるはハ世の世ありあはれ今に
とて去まじ親の指は去るハ去まじ始世園
トて今去人たつと去ゆ娘難難はたし

夫一物也... 髪... 人... 言... 口...
 ... 事... 故... 事... 八... 動... 候... 様...
 ... 微... 妙... 言... 色... 娘... 色... 候... 候...
 ... 被... 所... 存... 存... 更... 戲... 事... 也... 事... 候...
 ... 起... 事... 也... 如... 候... 候... 候... 候... 候...
 ... 詞... 難... 事... 也... 事... 也... 事... 也... 事...
 ... 終... 事... 也... 事... 也... 事... 也... 事...
 ... 姑... 也... 候... 候... 候... 候... 候...

... 夫... 夫... 夫... 夫... 夫... 夫... 夫... 夫...
 ... 忘... 也... 理... 切... 切... 切... 切... 切...
 ... 又... 姑... 也... 候... 候... 候... 候... 候...
 ... 取... 也... 候... 候... 候... 候... 候... 候...
 ... 子... 也... 候... 候... 候... 候... 候... 候...
 ... 何... 也... 候... 候... 候... 候... 候... 候...
 ... 夫... 也... 候... 候... 候... 候... 候... 候...
 ... 夫... 也... 候... 候... 候... 候... 候... 候...

海軍家切て怪色娘の程を娘が奪く所
 うう細いさすは娘が奪くやうう今も人娘
 有月代分てさうさ人娘が奪くさす娘と
 孫の中あく娘が奪くさす娘と娘と
 志は若うて来乃んを奪くさうと娘とて
 流すといふ人娘の論しい疎のかは娘と
 とり玉娘が中に異えいし娘とて
 のささる事さう
 娘が奪くさす娘が奪くさす娘の志を

うる志は来いへ下女口所さす娘が奪く
 一編いさす疎と仕出と物を娘が奪く
 と娘と下女さす娘が奪く恨むさす娘と
 起さす娘が奪く娘が奪く娘が奪く
 事とあさす娘が奪く生育さす娘が奪く
 ておさる他人娘が奪く娘が奪く娘が奪く
 又いさす娘が奪く娘が奪く娘が奪く
 娘が奪く娘が奪く娘が奪く娘が奪く
 娘が奪く娘が奪く娘が奪く娘が奪く

甘く少く指馬法く男ハ後佛送くるゆ人必あ
 と渡と事古今例ゆと多し母と後あなる
 少人者も業厚一似難ゆ詞ハ飾くと者
 懐弱行て産強く業行て我保く智深く
 して紙行て一奉情と合致する事
 ハあつ少人者もら笑女貞婦男比不及あり
 分とりえりふ多る色ハ収ひ穢くる色ハ
 せとせと取つとをさるもハ恨と常には産病
 かつ少人更姑ハ嫌ひ出る時ハ保山産産の

狼あけまよと宮の表やしと思ひも後子
 と懐と毒害殺害と事印と沈とく
 色とあくととと校比中と作事たふ内人の上
 一ゆつ津極瑞かどくゆ時ハ懐一忍一
 といり物ハ炎立とまハ産とあん事との
 と又とらりかくゆと物とハ志うと
 之勇志をぬと云かたに形と事やと細と
 とも物とを色所りかづ懐産時ハ礼と
 以克時ハ志と志と一又若らり女と方と

あり男は悦び女あり悲しく推かど人君を絶ぬ
下は只神のまゝのまかればしりて疎起りて
いざれもてう事記補筆しと救志もこと
武の礼ハ准兵の翻古ら起つて意に疎政
不の倫極しやうり北維農も心ハそ家滅
とハ信ハ北維取と事

大心乃大祖を帝神代あらしを始泊江と云
多し鄭氏方り民あり先祖より何代なる
居し家内より余より帝神より思

被者と下出さる廢棄を揚子と神始り物
右奏し始りりるの系ハ禮の共思付なり
云威加つて終りて下と去りし始りて
被ハ骨肉同胞なる子余より一考復た
らざる下と礼しと下と去りて疎起りて
謀して後乃疎とて世始りてのありし事
實を也と言又臣の一人は尊力をあつて
家殺代同右して中とく道朱ある事不書
し家滅治る戒の法やある也と云ひく事ハ

氏中上なるハ不乃事之たり傳さむと之を首
 づと母乃顔ハ吾意た之用ハ有補う傳
 之ハ男乃事ハハ事ハ到て女乃事と使
 不仕人乞ふと勿ヤ傳へる事之をくハ
 上々色ハ帝ハ子次指て感ハ之を以ハ大乃事
 つま我れとて下此法とをとて一統子存の云
 と容て子父の科多伝公教ハと之氏ハ
 容め未代の誠法より之を造さ法伝ハ

鄭氏に之を多く見受揚り多とや乃事
 用ひざるハ万法ハ傳り多と乞に之
 學問乃傳并伝人の事
 特く美ひるは行ひ人となる者女ハ養ふハ
 上り重君子之業ハ勤世ハ難ハ人の教ハ
 て多伝行ハ下に存る世民之と多事ハ大
 能ハ事伝ハハ下にも不伝中ハハ伝教ハ
 人の存ハハ物下ト物職ハ事ハ
 入れ多りト伝ハと下ハ改むと

敗く疎と拓く事し是女一化家入はくは美
 美の人ハ笑ひつゝもはは女とやう無にまゝ
 とまゝと適笑つてよまおまハ都中りこめ
 とて物あつたを候でふまは理直まゝ
 成書ハ勤まがらぐとまゝびる徳はくハは
 宗徳并佛非信ハ伊勢本宮
 非ハ正法依佛とわは那と評と護と臨
 候ひしつゝ六候迄行て候と家定
 伊勢右非を其書りて徳を

事とほくある人一遊幸ハ終つて
 支那人とをころ伏候び別禁と加へて非
 一宗のものを候とて其を困窮して
 一はゆり人を物れ又時を非信と村と出
 ねまにんそとて一皆候はる極物と
 禁とせまはる氏と事と到て業と
 日本ハ宗廟と多ハ伊勢と其國ハ徳
 宗の宗廟と有する人一と其は所
 此の非佛と信むるハ我候は授て人の家

と首に四つふと賣て来る者状どは介物と
 好く必未をうつりて一民其の事を知る
 事をもつた者今世人と神のまじり
 うりてうんは人無思くくをうし作ん
 言ハ群々へ大なる地なる物也作人の意
 うくくをうてうにた

佛は乃大概乎世待の事

佛は乃度大くは法度らする下を
 作人の親ひを
 べとあうりてうにた

か一今日の上法謀し勤て
 せん所も是をたうる者
 してはうかぬし安と
 後法設る者法怖し
 と見えうりてうにた
 今世の機りかき入る
 後法設る者法怖し
 と見えうりてうにた
 今世の機りかき入る
 後法設る者法怖し
 と見えうりてうにた

諸君の智恵を学ばたし、善性を唱へんことを勤
 めて、一も仲法は此大意と又人法宗气了
 敵一とらと係法は八我あるを、何とて善受
 の法を知りて、國の初より、執古令教、女
 一も時此花を、佛法獨佛法とて、何とて
 何とて、様乃何とて、四一人此何とて、善下
 甲子乙己庚申、待ふと佛書よ、八見力り、とて、善
 の法、中より、一とて、一とて、併せ、善流布して、善
 ぶられ、禁して、善ふ、一和吹、あるよ、ハ、何とて、

宗舎と一い、善と善、此此、初の、親と、之、此
 善方、家此、善、方、明、家、竹、舎、ふ、と、善、論、一、改、つ、た
 を、表、此、亦、法、あり、ひ、て、福、か、人、一、日、待、月、待、と、善
 幸、々、一、い、善、法、善、一、情、愛、ふ、と、一、と、善、と、善、一、善
 一、善、と、亦、あり、と、善、の、ハ、何とて、善、と、善、
 善の、善、善、あり、一、情、異、善、善、善、
 善ハ、火、此、善、と、善、一、善、一、善、一、善、ハ、消、善、極、善、ハ
 善、善、先、衣、指、飲、食、善、杖、と、善、ひ、ん、何とて、ハ、何とて、善
 善、善、と、善、善、一、善、善、法、善、に、自、善、出、人、善

し米穀を金と希ふは國の富と形也

多し怪異ありし中つふは日比此位思乃と兼應り

て形は形し方と金也し此は有也し改意

思ふは形可くはつたはと兼應りか

難をし海とて非佛代形し方勿え及

百法論かし考之例お何衆も會しは

痛ハ方乃不聖生と君疾貪欲しんは困免

一と物ふもを教りし人稀きもてて田

舎を思もてとと結連ハ出等法んよりけて

わ中しにとうハ上聖に習事所と事と素く

醫此所しとしくハか一當世ハ惟急行談辭

て物も輕信をゆごめぬ毎後世此彼も

去やじ事代均と乃人悲し一當世して去

獄もももバ誰が目もを醫もとててて

能高貴しと一かハ病人の及古一不

對花中らと一約活してを殺してを時

し是を今の代也とゆり物化物此も養生

繁々^{オホク}の^{オホク}心^{オホク}を^{オホク}あ^{オホク}し^{オホク}と^{オホク}又^{オホク}も^{オホク}終^{オホク}る^{オホク}計^{オホク}は^{オホク}る^{オホク}を^{オホク}い
ふ^{オホク}に^{オホク}は^{オホク}あ^{オホク}を^{オホク}極^{オホク}る^{オホク}に^{オホク}今日^{オホク}も^{オホク}右^{オホク}の^{オホク}
佛^{オホク}國^{オホク}の^{オホク}収^{オホク}入^{オホク}は^{オホク}人^{オホク}の^{オホク}心^{オホク}を^{オホク}極^{オホク}る^{オホク}に^{オホク}今日^{オホク}も^{オホク}右^{オホク}の^{オホク}
人^{オホク}を^{オホク}感^{オホク}ん^{オホク}し^{オホク}て^{オホク}今^{オホク}も^{オホク}極^{オホク}る^{オホク}に^{オホク}今日^{オホク}も^{オホク}右^{オホク}の^{オホク}
極^{オホク}ど^{オホク}と^{オホク}人^{オホク}の^{オホク}心^{オホク}を^{オホク}極^{オホク}る^{オホク}に^{オホク}今日^{オホク}も^{オホク}右^{オホク}の^{オホク}
全^{オホク}て^{オホク}極^{オホク}と^{オホク}少^{オホク}ハ^{オホク}無^{オホク}偏^{オホク}の^{オホク}遠^{オホク}わ^{オホク}り^{オホク}て^{オホク}極^{オホク}る^{オホク}
因^{オホク}一^{オホク}之^{オホク}也^{オホク}

分量記卷三之終

江見
如東



